

第2部 若手（女性）研究者の研究スタイル：苦勞したことや工夫したこと

三島亜紀子

1. 自分の研究生生活を振り返って：自己紹介を兼ねて

松田博幸氏の「研究者自身が自らの「生の過程」やそれが展開されてきた社会的・政治的状况に目を向け、自らの視点や考えがどのようにして構築されてきたのかを振り返りながら研究をおこなう必要がある」（松田 2010：32）との言葉から、試みに自分をふりかえってみました。

1991年に大学に入学しました。ベルリンの壁崩壊から1年あまり、バブル崩壊が始まったとされる年ですが、まだ人々はその余韻を堪能していた時期でした。そんな呑気な流れに任せるように、1年生の時はぶらぶら遊びに出かけたりバイトしたりしていました。2年生のころからは、日本の外をぶらぶらするようになりました（言い訳のようですが、ボランティア的なこともしました）。学生時代は合わせると2年ぐらい、ほっつき歩いたものです。ロバート・キャパという写真家にあこがれ、今こう書いていますと恥ずかしいですが、首から一眼レフカメラ（当時はフィルムの時代）をぶら下げて、「紛争」や「社会問題」を写真に残そうと意気込んでいました。場所は主に物価が安いアジア。とはいえ当時貧乏旅行する人の流行に乗ただけで、いい写真は撮れませんでした。ただのバックパッカーだったにすぎませんが、若い時期に絶対的貧困や非情の死の痕跡を見、異なる世界観に生きる人と触れ合えたのは貴重な経験でした。とりわけ「崩壊」したばかりの旧共産国で、ある社会理論が与える人々への影響力の大きさを実感したことは、今の研究につながっていると思います。

大学卒業後は福祉系の大学院に進みたかったのですが、学費の目途が立たず働き始めました。辞めても問題なさそうで良いかなと思いついた会社は、今でいう「ブラック」な教材販売会社でした。長時間労働、低賃金、「パワハラ」（後になって社会問題化されたので当時は当たり前と思っていました）、毎週のように出る退職者の名刺がメモ代わり、社外での社員同士の私語禁止など、あげるとキリがありませんが、人間扱いされません。そこでは経歴を偽り、営業員なのに「先生」と「詐称」して高校生に教材を売ります。この時、「本物の先生になりたい」と強く思いました。私は手にした給料を後に学費に充てましたので共犯者です。その負い目は今もあります。一方で、そこに流れ着いていた人の多くは、福祉と関わりの深い人々でもあったように思います。彼／彼女らは、ひとまず福祉サービスの枠外にいるものの、苦しんでいる。とはいえ「ブラック企業」は人を死なない程度に食わしてはいます。思えば当時、『蟹工船』などは共感的に読みました（もっと残酷で私の経験など取るに足らないものでしょうが）。平和な世の中でも、剥き出しのままの資本主義は私たちのすぐそばに実在しえる。この体験もいつも頭の中のどこかにあります。

松田博幸 2010「ソーシャルワーカーはセルフヘルプ・グループから何を学ぶことができるのか？：自己エスノグラフィーの試み」『社会問題研究』59, p.31-42.

三島亜紀子 2007『社会福祉学の〈科学〉性——ソーシャルワーカーは専門職か?』勁草書房
三島亜紀子 2012「日本のソーシャルワークにおけるポストモダニズムとモダニズム」一般社
団法人日本社会福祉学会編集『対論 社会福祉学4 ソーシャルワークの思想』中央法規
監修・平下耕三／文・三島亜紀子／絵・西村悦子 2010『妖怪バリエーションをやっつけろ
——きりふだは、障害の社会モデル』生活書院

2. 現在の研究テーマ

- ・ソーシャルワークのグローバル定義

「ソーシャルワークのグローバル定義における多様性（ダイバーシティ）の尊重」

『ソーシャルワーク学会誌』第30号、2015年。

「地域・民族固有の知（indigenous knowledge）」とはなにか？

「社会的結束（social cohesion）」とはなにか？

- ・ソーシャルワーク専門職の現在 : ソーシャルワークのグローバル定義の後で
- ・シックハウス症候群・化学物質過敏症患者と社会と家族
- ・「地域・民族固有の知（indigenous knowledge）」から読む障害者差別
障害平等研修（DET : Disability Equality Training）に活かす

3. これまで苦労したことや工夫したこと

「自己分析」というと就職活動のようですが、自分の得手不得手を見極めることは、研究の際にも大切なような気がします。たとえば、私は声が小さめですので、授業等では必ずマイクを使い、話した内容はパワーポイントスライドで確認できるようにしています。

国語の時間、とりわけ詩が苦手でした。小説も読みましたが、マンガが好きでした。感覚的な話になりますが、絵的なものだと頭に入りやすい頭のようなのです。拙著にも図を入れています。「近年、研究分野によっては、論文や学術的な記事の投稿にグラフィック・アブストラクトと呼ばれる要旨を視覚化した図やイラストを掲載要件とするものも増えてきている」（京都大学総合博物館 特別展「研究を伝えるデザイン」）ですので、これからも研究や授業等で工夫していきたいと思います。

4. 後輩へのアドバイス

水木しげる「好きの力を信じる。」

バートランド・ラッセル「科学者は超人ではないゆえに、われわれ同様に過ちを犯しやすい。」

（『人生についての断章』）

J. W. ゲーテ「ぼくたち（早世の子ども）は早く／生きている人たちから遠ざけられましたが、／この人（「知」への限りない探求心を持つファウスト）はいろいろと学んでこられたので、／ぼくたちを教えてください。」（『ファウスト』）